

# アカデミック・コミュニケーション能力育成を目指す英語教育の研究

English education for developing academic communicative competence

服部 孝彦<sup>1</sup>, 原田 龍二<sup>2</sup>, グレゴリー ジョンソン<sup>3</sup>, ティモシー ライト<sup>2</sup>, 高野 成彦<sup>4</sup>,  
ローレンス カーン<sup>1</sup>

Takahiko Hattori<sup>1</sup>, Ryuji Harada<sup>2</sup>, Gregory Johnson<sup>3</sup>, Timothy Wright<sup>2</sup>, Narihiko Takano<sup>4</sup>,  
and Lawrence Karn<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学国際センター, <sup>2</sup>大妻女子大学社会情報学部, <sup>3</sup>大妻女子大学比較文化学部,  
<sup>4</sup>大妻女子大学教職総合支援センター

キーワード : コミュニケーション能力, アカデミック・イングリッシュ, 英語教育  
Key words : Communicative competence, Academic English, English language education

## 1. 研究目的

本研究の目的は次の3つである。第1にコミュニケーション能力に関する理論的考察をとおして、コミュニケーション能力の全体像を解明し、アカデミック・コミュニケーション能力を明確に位置づけること、第2に英語教育方法論として、日本の英語教育に影響を与えた教授法をコミュニケーション能力の構成要素の視点も考慮して分類し比較検討をすること、第3に英語教育で日本の大学生に求められるアカデミック・コミュニケーション能力を育成するための指導法を開発することである。

## 2. 研究実施内容

アカデミック・コミュニケーション能力を育成するということは、アカデミック・イングリッシュ力をつけることである。アカデミック・イングリッシュの力とは、大学の専門分野において求められるレポートや試験で自分の考えを論理的で明晰に英語で表現できる力である。

アカデミックな文章の特徴の一つは、論点が明確であり、筋道が通っていること、すなわち論理と議論の構造を伴っていることである。アカデミック・イングリッシュは、主に大学の教員、研究者、学生に向けて、自分の考えを表明することを目的に表現され、それによって自説の正しさを納得させ自分の知性を証明する道具ともいえる。

アカデミック・イングリッシュでは、書き手または話し手の主張が主題としてパラグラフの

冒頭部分にはっきりと示され、パラグラフを通じてそれが一貫してサポートされていなくてはならない。また読み手や聞き手が議論の展開を正しく把握できるように、書き手や話し手は文章の構成を考え、文章中に適切な「つなぎ言葉」を提供する必要がある。この「つなぎ言葉」を英語では *logical connectors* とよぶ。この *logical connectors* を目的に合わせて適宜活用すると、文章の論理関係が読み手や聞き手にはっきりと伝わるだけではなく、文章全体の質が大きく高まる。

アカデミックな文章を書いたり話したりするためには、まずは自分の意見を持ち、その意見をどのような表現で、そしてどのような構成に基づいて述べるか、そして予想される反論にどのように備えるかというような側面について、思考を深め、論理的一貫性を持つ議論を展開することが必要である。アカデミック・イングリッシュの力をつけることにより、明晰な意見の提示と説得力のある表現ができるようになる。これは、単に大学教育において求められる能力ではなく、社会人となってからも、多くの場面で必要となる能力である。

日本の大学では、残念ながら学生がアカデミック・イングリッシュの力をつけるための教授法の研究は十分に行われているとはいえない。仕事上で発生する様々な問題に対して主観的ではなく、客観的、論理的によりクリティカルに考え、またその問題に対する解決策を明確に、説得力を持って述べる力を大学のアカデミッ

ク・コミュニケーション能力育成を目指す授業で培っていくことが期待される。そのために、本研究では、コミュニケーション能力理論研究に基づいた科学的なアカデミック・コミュニケーション能力育成を目指す教授法の開発を行った。

### 3. まとめと今後の課題

アカデミック・コミュニケーション能力を育成するための教授法を開発するために、コミュニケーション能力の理論研究と、コミュニケーション能力の構成要素との関連において英語教授法研究を行った。今後は、大学英語教育でアカデミック・コミュニケーション能力を育成するためのさらなる系統的な指導法と教材の開発をしていく必要がある。

### 4. この助成による発表論文等

#### ①雑誌論文

[1] Takahiko Hattori, Lawrence Karn, “Semiotic Analysis of a Contemporary Film as a Cultural Anthropology Media Artifact” 日本人類言語学会学術誌『人と言語と文化』（査読有）, No. 9, 日本人類言語学会, 2016, pp.19-42.

[2] 服部孝彦, 「パラグラフ・ライティング導入のための教材開発研究」The JAIAS Journal (査読有), No. 16, 日本総合文化研究会, 2016, pp.11-19.

[3] Takahiko Hattori, Lawrence Karn, “Language and Culture through the Rhetoric of Visual Analysis” 『大妻女子大学紀要 - 社会情報系 - 社会情報学研究』（査読無）, 第 25 号, 大妻女子大学, 2016, pp.113-127.

#### ②学会発表

[1] Takahiko Hattori, “Designing Course for Developing Academic Communicative Competence”, 日本言語文化学会第 23 回研究大会, 2016 年 6 月 25 日, 大妻女子大学

[2] Takahiko Hattori, “Developing Critical Thinking across the Japanese Senior High School Curriculum”, The Clute Institute, 2016 International Las Vegas Academic Conference, 2016 年 10 月 4 日, Monte Carlo Convention Center, Las Vegas, Nevada USA

[3] Takahiko Hattori, “Implementing a Genru-based Approach to Academic Writing” Hawaii International Conference on Education, 2017 International Conference, 2017 年 1 月 3 日, Mid-Pacific Conference Center at Hilton Hawaiian Village, Waikiki, Hawaii USA

#### ③その他（講演）

[1] 服部孝彦, 文部科学省, 埼玉県教育委員会, 一般財団法人自治体国際化協会主催 埼玉県外国語指導助手指導力等向上研修 (ALT Skill Development Conference in Saitama), Developing Communicative Competence: Theory and Classroom Practice, 2016 年 11 月 9 日, さいたま市民会館うらわ (招待講演)

[2] 服部孝彦, 文部科学省, 茨城県教育委員会, 一般財団法人自治体国際化協会主催 茨城県外国語指導助手指導力等向上研修 (ALT Skill Development Conference in Ibaraki), Developing Speaking Strategies, 2016 年 11 月 21 日, 茨城県教育研修センター (招待講演)